

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Diary of Hisakatsu Hijikata (V)

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-02-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 土方, 久功<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00000853">https://doi.org/10.15021/00000853</a>                  |

## 註

## 【第25冊】

- 1) Ngarmid = ガルミズ。アルミズとも記す。コロールの町からおよそ4km離れた、コロール島の東側突出部にある、海に面した村落。久功はしばしばこの村落を訪れ、その時のことを、詩や随筆に書いている。昭和10年時の人口102人（『昭和10年南洋群島島勢調査書』、南洋庁刊。以下、人口については、『島勢調査書』による）。
- 2) コ<sup>レ</sup>ヨル=コロール。パラオ諸島中部の島で、面積8km<sup>2</sup>。当時、南洋庁などが置かれ、南洋群島施政の中心となり、昭和10年時、日本人人口が5千人余に達し、島民人口千2百人余をはるかに上回っていた。
- 3) ドシヨケ<sup>ル</sup>=ドセケルとも記す。コロールの市街地の西方にある村落。
- 4) アケヅ=ア・ケヅとも記す。緒土の禿山。パラオの一番特徴のある風景の一つで、これを久功はこよなく愛していた。
- 5) 野元氏=野元辰美。コロールの公学校の校長。
- 6) Ngelūl = ディランゲル。久功が昭和4年（1929）パラオに住み始めた時、隣家にいた娘。『土方久功日記』（国立民族学博物館調査報告、以下、『日記』と略す）Ⅲ、註23参照。
- 7) Ngarakasoal = アラカサオル。ガラカソアオルとも記す。コロール島の南岸にある村落。昭和10年時の人口、127人。
- 8) Narakabesang = アラカベサン島。コロール島の西にある小さな島。当時、珊瑚礁の一部を埋め立てた土手道で、コロール島と結ばれていた。昭和10年時の人口679人。『日記』Ⅱ、註222参照。
- 9) 堂本内務部長=堂本貞一。昭和11年（1936）に赴任。短歌や俳句を作り、絵も描く文人で、後、「南洋画壇」の会長をつとめる（岡谷公二氏『南洋漂蕩』、130・131頁）。
- 10) a Ibedūl 葬儀=このア・イベツールの葬儀の様子は、「パラオの重要断片的地方誌」〈『土方久功著作集』〉（以下、『著作集』と略す）第1巻〉302～306頁に記されている。
- 11) Bilas = ビナス。小さな機械船。
- 12) アンガウル = Ngeyaūr。パラオ諸島南端に位置する隆起珊瑚礁の島。面積8km<sup>2</sup>。南洋庁の官営事業として、後に南洋拓殖株式会社によって、リン鉱採掘がおこなわれた。昭和10年時の人口1,200人。『日記』Ⅳ、註41参照。
- 13) a Dūbūsūh = ほら貝。
- 14) boks = 馳走。
- 15) Kōlloi = 挽歌。
- 16) odosongngl = 家の前の石畳。
- 17) a Keyūkl = ア・ケユックル。イベツールの一族のもので、マリユル、ギラケツの後を受けてイベツール職に就きうる資格者。
- 18) 「レンゲ」牧師=ドイツから来た新教の宣教師。パラオ本島のオギワルを拠点にしてパラオでキリスト教の布教活動を行いながら、国から持ってきた大量の薬を島民に施して、着々と島民間に評判を得ていた（『鶏』、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』〈『著作集』第6巻〉73頁）。
- 19) Ūmang = ウマン。第2イケラオの出で、死んだイベツールに育てられた。ドイツ時代には巡警長を務め、ドイツ系の混血児で古くからキリスト教に帰依し、新派の大株であった。
- 20) Ngiraked = ギラケツ。イディツの一族で、当時ギリヨウ・イディツ職。イベツールの次位職にあり、役所から村長職を命ぜられていた。
- 21) Kisaūl = キサオル。イディツ一族の女で、女子青年組合長をしていた。久功と親しかった。当

時、32歳。終戦後、日本を訪れ、久功と会った。

- 22) Blüks = ブルックス。墓石。
- 23) 「オイカワサン」 = マルキョクの前北部大酋長ルクライの息子で、当時役所の巡警長をしていた。
- 24) tiyakkl = ヤシの芽を結んだもの。
- 25) meyolt = ヤシノ新芽。
- 26) 囑託ノ話 = 久功は3月9日付で南洋庁の地方課の囑託となり、後、昭和16年(1941)5月15日から物産陳列所勤務となる(商工課・地方課兼務)。
- 27) ヤップ ヨリ遺書来ル = ナムチョック(ラモトレク)島で起きた山田事件に関する遺書のこと。倉橋弥一著『孤島の日本人工』には、次のように書かれている。

ナムチョック島に住んでいたコブラ仲買人の山田がヤシの木から落ちて死んだというが、山田の死因に疑問を抱いた久功は、ナムチョック島へ杉浦佐助を調べに行かせた。佐助は、山田の妻である島民を呼んだら、妻は泣きながら、山田の遺書を佐助に見せた。遺書は、ノートに書かれてあり、遺産の分配について細目を記してあった。妻に訊ねたが要領を得なかったため、佐助はこの遺書を預かってサタウル島に帰った。久功は遺書を見たが、以前山田からもらった手紙と字が違っていた。遺書は偽物で、山田はナムチック島の住民に殺されたのだと、久功は考えた。山田の27年の間に貯蓄した多額の金が、島民の何者かのものになってしまったのでは、山田の妻が可哀そうだと、久功は思った。それでサタウル島を去るにさいし、佐助はカバンに山田の遺書を持っていった。パラオで久功は佐助を連れて役所へ行って、山田の遺書を見せ、死因についていろいろ陳述した。

細部については、『日記』の記述と若干異なるところはあるが、大筋ではその通りであろう。なお、昭和10年時、ナムチョック島の人口は177人(うち日本人は1人)だった。
- 28) Peliliyō = ペリリュー島。パラオ諸島南部に位置する隆起サンゴ礁の島で、アンガウル島とともに、燐鉱石の産地であった。昭和10年時の人口939人。
- 29) 大工サン = 杉浦佐助。久功の彫刻の弟子。『日記』Ⅱ、註221参照。
- 30) Hadūs = アズス。石積み道。
- 31) セムシノ Tokai = パラオ本島北部の村ガラルドに住み、モデクゲイの指導的地位にあった。久功はしばしばトカイの家泊まった。久功の民族調査、遺跡調査に協力し、同行することもあった。なお、杉浦佐助の木彫の初期作品に、トカイをモデルにした作品「トカイ像」が現存している(岡谷氏『南海漂蕩』38・39頁)。
- 32) ūdōūd = ウドウド。パラオ珠貨。『日記』Ⅱ、註234参照。
- 33) Ilamms = イラムス。コロールの町の東はずれにある家。ゲルール、クコン、サカビツ等が住み、久功はしばしばこの家を訪れた。
- 34) Obak-rūbil = オバック・ルビール。久功が初めにパラオのコロールに住んでいた時、隣家にいた娘。『日記』Ⅲ、註23参照。
- 35) Namottzok 事件 = ナムチョック島に住んでいた、コブラ仲買人、山田の横死事件。
- 36) 公学校 = 島民の子供達が通う修業年限3年の小学校。『日記』Ⅱ、註218頁参照。
- 37) 亡クナツタ Ibedūil ノ家ニ盛ナ「ボックス」ガ運バレタ = この馳走と離縁金等については、「パラオノ重要断片的地方誌」(『著作集』第1巻)306～310頁に記されている。
- 38) Pūlatong = プラトン。瀬戸引き皿。
- 39) Tolūk = トルク。鼈甲皿。
- 40) Eltūlong ト a Yoboh ガヤツテ来タ = エルトロンとアヨボホの話は、「変わりゆく一面——土地」として、『著作集』第1巻、291・292頁に記されている。

- 41) 原則的ナ所ヲ覚エニ書イテ置クニ止メル=この土地に関する原則的なところは、「変りゆく一面——土地」(『著作集』第1巻) 293～298頁に記されている。
- 42) Idid = イディヅ。コロールの第一長老 Ibedūil を出す, 第一 Kεblil 氏族。
- 43) Ngarakabesang ノ Hobak = アラカベサンのホバク。Hobak ra Iwong。Ibedūil の第二継承者。
- 44) Kloū blai = クロウ・ブライ。母屋, 主人家族住居。
- 45) ūm = ウム。厨屋, 末派下男等住居。
- 46) ulōngang = ウロガン。家神の祠。
- 47) Olbed = オルベヅ。前庭石畳で墓場でもある。
- 48) a Bai = ア・バイ。会所, 公衆屋, 集会所。『日記』Ⅱ, 註 211 参照。
- 49) a Dianggal = デイヤンガル。舟庫。
- 50) a taoh = タオフ。船着場。
- 51) a Ibedūil ノ 離縁金ニ就イテ = このア・イベヅールの離縁金については、「ア・イベヅールの葬儀」(『著作集』第1巻) 307～310頁に記されている。
- 52) 南貿 = 南洋貿易株式会社。『日記』Ⅱ, 註 214 参照。
- 53) 住友, 松野君 = 住友至, 松野祐保。南洋拓殖株式会社の技術者。
- 54) 中村 = アンガウル島内にある村落。昭和10年時の人口 85 人。
- 55) 新村 = アンガウル島内にある村落。昭和10年時の人口 239 人。
- 56) マトマ-ton = ドイツ領時代後半以降盛んになった行進踊。行進の動作や「レープ, ロイ」などの掛け声を伴い, (日本的) 西洋音楽風のメロディやしばしば日本語混じりの歌詞からなる歌をメドレーでつないだものに合わせて踊るもので, ミクロネシアに広く分布する。パラオでは, 行進踊りはアンガウルでチューク(トラック)の人たちが広めたといわれる(小西潤子氏「芸能にみるパラオのアイデンティティの多層性」, 『静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会科学編』2008年)。
- 57) Rūbak = ルバク。酋長, 長者, 長老。
- 58) Kesekes = ケセケス。パラオにおける信仰の新結社モデクゲイの賛歌。『日記』Ⅲ, 註 134 参照。
- 59) 南興 = 南洋興発株式会社。『日記』Ⅱ, 註 204 参照。
- 60) Ngasiyas = ガシヤス。アシヤスとも記す。ペリリュウ島中央にある村落。昭和10年時の人口 226 人。
- 61) Ngardoloh = ガルドロルク。ガルヅロロゴ, ガルプロロホ, ガルドロロホ, ガルドロロゴとも記す。ペリリュウ島東部にある村落。昭和10年時の人口 122 人。
- 62) Ngarohol = ガルコル。ガルゴル, ガルホルとも記す。ペリリュウ島北部にある村落。昭和10年時の人口 178 人。
- 63) Ngarkeyūkkī = ゲルケユックル。ガルキョックルとも記す。ペリリュウ島西部にある村落。昭和10年時の人口 138 人。
- 64) a Pkūl a belū = ア・プクル・ア・ベルー。フクラブルーとも記す。ペリリュウ島西部にある村落。
- 65) 玉枝 = 日本で洋裁を勉強をするために, 久功等とともに日本へ渡航する島民の娘。
- 66) 文化協会 = 南洋群島文化協会。南洋庁長官を会長とし, 月刊誌『南洋群島』の発行, 書籍の出版, 展覧会や講演会の開催など, 文化活動をする南洋庁の外郭団体。昭和14年4月に東京からパラオへ移り, 『南洋群島』がパラオで編集, 刊行されるようになった。
- 67) 野口氏 = 野口正章。南洋群島文化協会囑託で, 『南洋群島』の発行人兼編集人となった。昭和

- 16年2月、病気で内地に帰り、代って中島幹夫が発行人兼編集人になった。
- 68) パラオノ昔ノ宇宙観=パラオ島民の宇宙観・自然観については、「パラオ島民の自然観」(『著作集』第2巻, 282~285頁)に記されている。
- 69) サトワル事件=久功等がサトワルに住み始めた半年前に起きた、黄(岩崎)永三変死事件。
- 70) 倶楽部=昌南倶楽部。『日記』Ⅱ, 註216参照。
- 71) tziliyang, 島=ティニアン島。ティニアン, チュニアンとも記す。『日記』Ⅱ, 註202参照。
- 72) 兄上夫妻=土方久俊・文子夫妻。
- 73) 英子=中沢英子。久功の妹, 中沢佑の妻。『日記』Ⅰ, 註20参照。
- 74) 久顕=久功の弟。明治34年(1901)生まれ。慶応義塾大学医学部卒。『日記』Ⅰ, 註33参照。
- 75) 小山=小山直彦。学習院中等科の同窓生。後, 大蔵省財務局長を務め, 学習院の常務理事となった。
- 76) 府立高等=現・東急東横線都立大学駅のこと。
- 77) 梅子叔母様=柴山梅子。柴山昌生の妻。園田実徳の六女。明治27年(1804)生まれ。
- 78) 昌道=柴山昌道。久功の叔父柴山昌生の長男。大正4年(1915)生まれ。
- 79) 百合子=柴山百合子。柴山昌生・梅子の長女。
- 80) 譲二叔父様=本田譲二。柴山矢八の二男。昌生の弟, 直矢の兄。東京帝大在学中に, 母の実家の弟家の名籍を継いで本田姓となる。『日記』Ⅰ, 註143参照。
- 81) 昌生叔父様=柴山<sup>まさき</sup>昌生。久功の祖父・柴山矢八(男爵)の長男。『日記』Ⅰ, 註67参照。
- 82) 綾子=小倉綾子。柴山昌生・梅子の次女。大正11年(1922)生まれ。鹿児島の小倉家を継いだ。
- 83) 昭子=柴山昭子。昌生・梅子の三女。昭和2年(1927)生まれ。
- 84) 妙子=柴山妙子。昌生・梅子の四女。
- 85) 長四郎=皿井長四郎。皿井立三郎(医学博士)と清江(久功の祖母・琴子の妹)の四男。
- 86) 五郎=皿井五郎。長四郎の弟。
- 87) 甘露寺方房=義長(伯爵)の次男。学習院中等科の同窓生。明治33年(1900)生まれ。
- 88) 倉橋弥一=高千穂高等商業学校卒業後, 10年間中学校教員をした後, 著述生活をする。『炬火』の旧同人。昭和18年(1943)に『孤島の日本大工——杉浦佐助 南洋綺譚』を刊行した。昭和20年(1945)池袋駅で鉄道事故により死去。
- 89) 川路氏=川路柳虹。詩人, 美術評論家。明治21年(1888)東京生まれ。『日記』Ⅰ, 註249参照。
- 90) 静子サン=久功の弟・久顕の妻。昭和19年(1944)4月死去。
- 91) 川上ノオヂサマ=川上親恒。『日記』Ⅰ, 註222参照。
- 92) 佑サン=中沢<sup>たすく</sup>佑。久功の妹, 英子の夫。『日記』Ⅰ, 註60参照。
- 93) 青田幸吾=『日記』Ⅰ, 註122参照。
- 94) 三沢=三沢寛。東京美術学校彫刻科の同級生。
- 95) 青山師範駅=現・東急東横線学芸大学駅。
- 96) 上原サン=久功の祖母・琴子の妹・小菊の夫。勝雄は次男, 春子は四女。
- 97) 笹塚=『日記』Ⅰ, 註9参照。
- 98) 宇多チャン=山口宇多子。山口昇の妻。中井文治郎, 良三郎の妹, 惣之助の姉。『日記』Ⅰ, 註115参照。
- 99) 昇氏=山口昇。土木学者。明治24年(1891)静岡県生まれ。当時, 東京帝大教授。『日記』Ⅰ, 註116参照。
- 100) 大田和夫婦=大田和とよ(旧姓水村)夫妻。水村君子, 園子の姉。

- 101) 八千代サン＝上原八千代。伸次郎，小菊の三女。
- 102) 松岡正雄＝松岡太和。洋画家，彩漆画家。明治27年（1894），奈良県に生まれる。東京美術学校図画師範科に進学。在学中に二科展に出品，二科賞を受賞。後，彫刻科に入り，久功と同級となる。漆工芸技術を学び，漆絵を描く。昭和4年（1929），府立高等学校創立と共に教職に就く。
- 103) 愛子オバサマ＝土方愛子。与志の母。『日記』Ⅰ，註144参照。
- 104) オ玉様＝土方玉子。『日記』Ⅰ，註94参照。
- 105) 大山柏侯＝陸軍軍人，考古学者，公爵，貴族院議員。明治22年（1889），東京に生まれる。父は，明治の元老，陸軍大将・大山巖。はじめ，軍人の道を歩んだが，ヨーロッパ留学を機に考古学の知見を深め，帰国後には自邸内に「史前研究室」を設立し，史前研究会を組織した。
- 106) 湯地＝湯地孝。学習院中等科の同窓生。後，日本近代文学者となる。
- 107) 中洲＝中央区日本橋地域の南東に位置し，隅田川の西岸にあり，清洲橋が架されている。当時，日本橋区中洲。現・中央区日本橋中洲。
- 108) 高村光太郎氏＝詩人，美術家。明治16年（1883），東京に生まれる。光雲の長男。東京美術学校彫刻科卒業後，欧米に遊学。大正3年（1914），智恵子と結婚。昭和4年（1914），智恵子の実家が破産し，この頃から智恵子の健康状態が悪くなり，昭和13年（1938）に智恵子と死別。その後，戦意高揚のための詩を多く発表した。
- 109) 長田恒雄氏＝詩人，作詞家。明治35年（1902），静岡県に生まれる。
- 110) 山崎泰雄＝詩人。学習院中等科の同窓生。明治32年（1899）に生まれる。
- 111) 「ラグーザオ玉夫人」＝画家。夫はイタリア人彫刻家のヴィンチェンツォ・ラグーザ。1861年，江戸に生まれる。若い頃から，日本画，西洋画を学んだ。工部美術学校で教鞭をとっていたイタリア人彫刻家ラグーザと出会い，西洋画の指導を受け，モデルもつとめた。1880年，ラグーザと結婚。
- 112) 佐伯米子氏＝洋画家。明治30年（1897）東京に生まれる。大正9年（1920），佐伯祐三と結婚。大正12年（1923），夫とともにフランスへ渡る。1926年帰国し，27年再び渡仏。夫，娘弥智子が相次いで死去し，28年帰国。
- 113) 関チャン（千田是也）＝『日記』Ⅱ，註11参照。
- 114) 「キツネ」＝『日記』Ⅱ，註39参照。
- 115) 丸山定夫＝俳優。明治34年（1901），愛媛県に生まれる。大正6年（1917），広島を拠点に全国を巡業する「青い鳥歌劇団」に入団し，俳優としてのスタートを切る。大正13年（1924）上京し，築地小劇場研究生となる。昭和20年（1945）8月，中国地方巡回公演に備えていた広島で桜隊メンバーとともに被爆し死去。
- 116) 薄田研二＝俳優。『日記』Ⅱ，註77参照。
- 117) 岸輝子＝女優。明治38年（1905），北海道に生まれる。大正14年（1925），築地小劇場研究生となる。昭和17年（1942），千田是也と結婚。
- 118) 山本安英＝女優。『日記』Ⅰ，註323参照。
- 119) 波多野サン＝波多野敬直。『日記』Ⅰ，註86参照。
- 120) 環サン＝島村環。島村久と，久功の祖母・琴子の妹，米子との次男。
- 121) 光子サン＝向山光子。島村久，米子の三女。向山均（海軍中将・男爵）の妻。
- 122) 八幡一郎氏＝考古学者。明治35年（1902）生まれ。東京国立博物館考古課長，東京教育大学教授等を務める。当時，東京帝大人類学科講師。
- 123) 長谷部言入氏＝人類学者，解剖学者。明治15年（1882）生まれ。大正4年（1915），ミクロナシア文部省調査に隊員として参加。昭和8年（1933）～10年（1935），東京帝大医学部長，

- 昭和14年(1939), 人類学科主任教授となる。
- 124) 杉浦健一氏=文化人類学者。明治38年(1905)生まれ。昭和12年(1937)から、南洋庁囑託としてミクロネシアの現地調査をする。当時、東京帝大人類学科副手。
- 125) 実吉サンノ御老人=島村環の妻・ぬい子の父、実吉純郎(子爵)。
- 126) 柴木<sup>あつし</sup>照=美術家、民族学研究家。『日記』IV, 註64参照。
- 127) 高橋文太郎氏=民俗研究家。明治36年(1903)東京保谷に生まれる。明治大学政経学部卒。武蔵野鉄道(現・西武鉄道)退職後、民俗研究に打ち込み、昭和14年(1939)、私財をつぎ込み、生地の保谷の広大な土地を提供し、渋谷敬三と共に、日本民族学会附属民族学博物館を設立しアチックミュージアム所蔵の民具等に移し展示した。
- 128) 敦チャン=久功の初恋の人(岡谷氏『南海漂泊』54~58頁)。
- 129) 増子チャン=小城齊・たかの六女。文子の妹。
- 130) 元チャン=小城齊・たかの七女。文子、増子の妹。
- 131) 南洋庁=『日記』II, 註210参照。
- 132) 野村益三子爵=明治8年(1875)、東京生まれ。東京帝大農科大学卒。明治43年(1910)ドイツ留学。44年(1911)、貴族院議員に就任し、昭和21年(1946)まで在任。南洋水産会長、産業組合中央金庫、大日本育英会各評議員、国語審議会委員等を歴任。
- 133) 水産講習所=明治30年(1897)、農商務省が設置。戦後、東京水産大学となり、2003年、東京商船大学と統合し、東京海洋大学となる。
- 134) 園田サンノ清彦オヂサン=園田清彦。柴山昌生の妻・梅子の兄。畜産業を営み、東京競馬倶楽部、日本レース倶楽部理事を務めた。
- 135) 妙本寺ノモトノ家=妙本寺に接して建っていた久功の祖父、柴山矢八の別荘。矢八は退役後、ここに住み、後、長男・昌生の一家も移り住んだ。久功は、バラオへ行くまで、一時この家で、昌生の家族と同居していた。
- 136) 焼キステラレタ バラオ ノ文様土器=久功はバラオから大量の文様土器を鎌倉の叔父・柴山昌生のところに送ったが、ある箱から白蟻が見つかったので、箱ごと全部焼いてしまった。土器片などはその程度の火では何ともないと思い、跡片付をした出入りの植木屋の吉五郎を、材木座の家まで訪ねて聞いたが、とうとうわからずじまいだった(「バラオ文様土器片探集記」〈『著作集』第2巻〉321頁)。
- 137) 秋庭サン=『日記』I, 註32参照。
- 138) 島村サン=『日記』I, 註202参照。
- 139) 山内賢洲=バラオのコロールに本店を置き、ヤップ島、テニアン島に支店を持つ山内百貨店の店主。
- 140) 井関院長=井関鼎。バラオ病院長。
- 141) 羽根田弥太氏=バラオ熱帯生物研究所員。『日記』IV, 註87参照。
- 142) 展覧会=「南洋彫刻家 杉浦佐助作品展覧会」。銀座八丁目の三味堂ギャラリーで、6月21日から24日まで開かれた。出品作品は、丸彫15点、浮彫3点、面14点の合計32点。ほかに素描若干と久功が浮彫数点を賛助出品し、島の写真、腰巻、ステッキ、お盆などの製作品を展示した。美術雑誌、新聞等で取り上げられ、美術界に衝撃を与えた(岡谷氏『南海漂蕩』80~87頁)。
- 143) 金子九平次君=彫刻家。『日記』II, 註125参照。
- 144) 綾サン=土方綾子。土方与志の義理の姉。『日記』I, 註40参照。
- 145) 平櫛田中氏=彫刻家。明治5年(1872)、岡山県に生まれる。明治26年(1893)、大阪の人物師、中谷省古に弟子入りし木彫の修行をしたのち、明治31年(1898)上京し、高村光雲の門

- 下生となる。大正3年(1914),再興院展に出品し,同人に推挙される。昭和12年(1937),帝国芸術院会員,19年,東京美術学校教授となる。
- 146) 伊原氏=伊原清吉。小城斉・たかの五女・澄子(文子の妹)の夫。
- 147) 吉田芳明氏=彫刻家。明治8年(1875),東京に生まれる。島村俊明に牙彫,木彫を学ぶ。東京彫工会,日本美術協会などに出品。大正13年(1924),帝展審査員となる。
- 148) 中井ノ惣チャン=中井惣之助。『日記』I,註2参照。
- 149) 文化協会ノ方ノ展覧会=土方久功氏蒐集南洋土俗品展。6月24・25日の両日,京橋の南洋群島文化協会東京出張所で開催。神像,彫刻,仮面,日用品,土器等300余点を展示。その後,7月8日に東京帝大の人類学教室でも展示され,終了後,展示された資料は,東京帝大の所蔵資料となった。
- 150) 朝日新聞ノ飯沢氏=飯沢匡。劇作家,演出家,小説家。本名,伊沢紀。明治42年(1909)生まれ。伊沢多喜男の次男。文化学院美術科卒業後,東京朝日新聞社に入社。1932年,劇「藤原閣下の燕尾服」で劇作家デビュー。この展覧会を「東京朝日新聞」が,7月1日から3日にわたり,「南洋土俗風俗」と題して紹介した。
- 151) 松田糸太郎=劇団制作家。築地小劇場創立時,浅利鶴雄とともに経営部に属し,名マネージャーと言われた。
- 152) 本多正震=学習院初中等科の同窓生。明治33年(1900)生まれ。子爵・正復の長男。十五銀行に入る。
- 153) 金田一京助氏=言語学者,民族学者。明治15年(1882)生まれ。ユーカラの研究で帝国学士院賞受賞。久功の著書『サテワヌ島民話』(昭和28年刊)の序文を書いている。
- 154) 捷チャン=島村捷三郎。久功の祖母・琴子の甥。『日記』I,註66参照。
- 155) 松元(中北泰彦)=学習院初中等科の同窓生。
- 156) 木下孝則氏=洋画家。明治27年(1894),東京に生まれる。京都帝大,東京帝大中退。大正10年(1921),第8回二科展に初入選。渡仏。大正12年帰国。昭和元年(1926),前田寛治,佐伯祐三等と「一九三〇年協会」設立。昭和3年(1928)渡仏。昭和10年(1935)帰国。翌年「一水会」の創立に参加。
- 157) 高勇吉=チェロ奏者。明治34年(1901)東京生まれ。東京音楽学校卒業後,ドイツのライプチヒ音楽学校でグレンゲルに学ぶ。帰国後は,独奏およびダスコ三重奏で活躍する。
- 158) 中西氏=中西悟堂。野鳥研究家で歌人・詩人。明治28年(1895),石川県に生まれる。明治40年(1907),養父と祖父母とともに神代村の祇園寺に移住。明治44年(1911),深大寺にて僧籍につく。この頃より歌を始め,詩人と交わる。
- 昭和元年(1926),千歳烏山に移り住み,田園生活に入る。質素な生活とともに,昆虫や野鳥の観察を始める。昭和9年(1934),内田清之介,黒田長礼,鷹司信輔,山階芳磨,柳田国男,荒木十畝らの文化人の後援を得て,日本野鳥の会を創立,雑誌『野鳥』を創刊した。
- 159) 「美ノ国」=月刊美術雑誌『美之國』。8月号で特集が組まれ,5ページに及ぶ杉浦佐助の彫刻の写真,佐助の「私ノ手記」,今井繁三郎と江川和彦のエッセー等が掲載されている(岡谷氏『南海漂泊』142頁)。

## 【第26冊】

- 160) 宮ヶ丘=目黒区の町名。現・南1〜3丁目・碑文谷3丁目。
- 161) 吉田謙吉=舞台美術家。『日記』I,註198参照。
- 162) 東久世ノ信サン=東久世通信。通敏(伯爵)と玉子との次男。
- 163) 吉五郎=柴山家に出入りしていた材木座の植木屋。パラオから送られたパラオ文様土器の後片

- 付けをした（「バラオ文様土器片採集記」〈『著作集』第2巻〉321頁）。
- 164) 慈恵医大ノ新井正治氏＝人類学者。明治32年（1899）、長野県に生まれる。東京慈恵会医科大学を卒業し、解剖学教室の助手に就任。昭和8年（1933）助教授に、昭和18年（1943）に教授になる。
- 165) 太平洋協会＝昭和13年（1938）に設立された国策調査研究機関。副会長を松岡洋右、理事を鶴見祐輔とし、鶴見が協会の運営を取り仕切った。所員には、平野義太郎、関嘉彦らがいた。機関誌『太平洋』をはじめ、数多くの出版物を刊行し、戦前、戦中の太平洋諸島研究に一つの役割を果たした。
- 166) 平野義太郎氏＝法学者。明治30年（1897）生まれ。東京帝大法学部助教授時代、フランクフルト大学に留学してマルクス主義を研究する。昭和5年（1930）、帰国後、治安維持法違反で検挙され、免官処分、執行猶予付きの有罪判決を受けた。昭和12年（1937）、留置中に転向。
- 167) 三吉朋十氏＝探検家、研究者。明治15年（1882）、北海道生まれ。札幌農学校卒。マニラに渡航し、昆虫採集。三井物産香港駐在員等を経、第1次大戦中は、インド、ビルマを旅行。ジャワ島ニラバヤ市に4年居住。昭和7年（1932）、台湾総督囑託としてチモール方面、ジャワ、バリ、昭和12年（1937）、ルソン、バラワン島に旅行。
- 168) オチサマ＝皿井立三郎。医学博士。妻・清江は、久功の祖母・琴子の妹。
- 169) オ慶チャン＝皿井慶子。立三郎、清江の長女。昭和19年（1944）死去。
- 170) 隼チャン＝皿井隼之介。立三郎、清江の次男。
- 171) 中川善之助氏＝法学者。明治30年（1897）生まれ。当時、東北帝国大学教授。民法学の権威で、家族法で優れた業績を残した。
- 172) 原田淑人博士＝東洋考古学者。明治18年（1885）、東京生まれ。白鳥庫吉の下で東洋史を学ぶ。東京帝大教授となり、文学部に考古学講座を創設。東洋考古学の開拓者と言われる。
- 173) 伊藤熹作＝舞台美術家。『日記』I、註16参照。
- 174) 綱町＝三田綱町。明治5年～昭和42年の地名。現在の港区三田2丁目1～3、17～21。
- 175) Ofarebūr＝オジャラブル。サタワル島出身で、アングウル島の燐鉱採掘のための入夫として連れてこられたが、交代の時期が来てもサタワル島へ戻らず、10年以上もバラオに留まっていた。久功はカヤンガル島で出会い、サタワル島へ帰りたいが旅費がなくて帰れないと訴えていたオジャラブルを、通訳兼入夫として、サタワル島へ一緒に連れてゆくことにした（『流木』〈『著作集』第7巻〉16・17頁）。
- 176) 熱帯生物研究所＝バラオ熱帯生物研究所。昭和9年（1934）、東北大学の生物学教授・畑井新喜司の奔走で生まれた文部省管轄の研究機関。昭和10年（1935）3月、コロール島アラバケツに実験所が完成すると、畑井が初代所長となって赴任した。実験所のほか、別棟の図書室と宿舎からなり、数艘の採集船も持っていた。専任の研究員は置かず、内地の無給助手や大学院生を中心とする若手研究員27名を委嘱し、半年、一年と期限を切って滞在させるシステムをとった。久功は、この研究員と親しくしていた（岡谷氏『南洋漂蕩』183頁）。
- 177) Kūkōng＝クコン。ゲルールの義妹。当時20歳位。散文詩「ガルミツ行」（『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』所収、後、『著作集』第6巻）などにその名が見られる。
- 178) Sahalbid＝サカビヅ。ゲルールの妹。当時23歳。久功に「サカビヅ」と題された詩がある（『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』所収、後、『著作集』第6巻収載）。
- 179) 南洋松島＝コロール島からバラオ諸島の南端に近いベリリュー島にかけて連なっている大小無数の島々のこと。バラオ語では、Heleb'ahab（ヘレバハブ）という。バラオ松島とも呼ばれたほど美しい景観をなしている。今は、ロックアイランドと呼ばれている。
- 180) 高松ト云フ人＝高松一雄。元來は指物師であったと考えられる。島民の中にまじって住み、家

具製作のかたわら、あちこちの半端仕事を手伝って、暮らしを立てていた。久功の推薦で、昭和16年(1941)12月1日、囑託として物産陳列所に入り、その仕事を手伝った。その直前、11月28日に久功が独立官舎に移ると、間もなく、その屋根裏部屋に住んだ。中島敦が来島すると、高松と親しくなった(岡谷氏『南海漂蕩』185～188頁)。

- 181) Maria = マリヤ。コロール島第一の名家の出身で、イギリス人と島民の混血児で島の有名人たるウィリアム・ギボンの養女で、内地の女学校に数年留学したのち、戻って結婚し、娘Gresをもうけるが、嫉妬深い夫を追い出してしまう。マリヤはしばしば久功のところを訪れ、「パラオ地方の古譚詩」の邦訳を手伝っていた。中島敦の『南島譚』の中に、「マリヤン」として出てくる(岡谷氏『南洋漂蕩』, 143・144頁)。当時24歳。長女Gresは4歳だった。
- 182) Heldebehel = 就イテ非常ナ間違ヒラシテ居タ = 『日記』原本第15冊96頁は、『土方久功日記』Ⅲ, 234・235頁にあたり、そこにHeldebehel (Kaldbekel) について記されている。
- 183) 大谷光瑞氏 = 宗教家、探検家、浄土真宗本願寺派第22世法主。伯爵。明治9年(1876)、第21世法主大谷光尊の長男として生まれる。大正天皇の従兄弟。1902年以来、教団活動の一環として西域探検のため、中央アジアに渡り、仏蹟の発掘調査等にあたった。
- 184) 食堂ノボーイ Odoriyong ト Badehesang ガ = この随筆は、「南洋の鳥景」と題し、『野鳥』第7巻2号(1940年2月)に掲載されている(後、『著作集』第6巻に収載)。
- 185) 南方離島記 = この9月29日から9日間にわたる離島旅行記は、書き改められ、「南方離島記」と題され、『著作集』第6巻266～292頁に収載されている。ただし、10月6日の後半部分(『日記』原文152～157頁)に書かれている、①国光丸船長に対する批判、②南洋拓殖株式会社に対する批判、③スペイン人布教師に対する批判は、『著作集』には収められていない。
- 186) サンパン = 沿岸や河川で用いる木造の小船。甲板のない寄木船で、一般に帆がなく、喫水が浅く、平底である。
- 187) ヤップ = カロリン諸島西部にある島。北緯9°30′, 東経138°10′に位置し、環太平洋造山帯上にある陸島で、大小4つの島からなる。陸地総面積101km<sup>2</sup>。石貨で有名である。昭和10年時の人口3,867人。
- 188) コブラ = 成熟したヤシの果実の脂肪層をはぎ取って乾燥したもの。工業的な脂肪原料として重要で、マーガリン、石鹸、蝋燭、ダイナマイトなどを作る原料となる。島の重要な現金収入源となっていた。
- 189) 昨夜ハ夜中迄流シテ = この10月2日の記は、書き改められ、「ナポレオン」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』175～181頁に収載されている(後、「南方離島記」〈『著作集』第6巻〉275～280頁、収載)。
- 190) Melekeok = マルクヨク。パラオ本島中央部、東海岸にある村落。昭和10年時の人口138人。
- 191) ソノ向フニ、小サナ小サナ「ヘレン」ノ島ガ見エル = ヘレン島滞在中のことは、「ヘレン島」と題され、『野鳥』第7巻第5号(昭和15年5月)に掲載されている。
- 192) 例ノ「バイ」ノ模型 = 金に困っていた高松一雄が、長い時間をかけて作ったア・バイの精巧な模型を新聞社(南洋新報)の山本耕三に捨て値で売ろうとしたのを、久功が間に入って、結局物陳の所属する商工課が買い取ることになった(岡谷氏『南海漂蕩』185～186頁)。
- 193) 田山氏 = 田山利三郎。珊瑚礁の研究者。当時、東北帝国大学講師。『土方久功日記』Ⅳ, 註63参照。
- 194) デング = デング熱。『日記』Ⅲ, 註31参照。
- 195) 甲谷陀丸 = カルカッタ丸。大正6年(1917)竣工。総トン数5,226トン。三菱長崎造船所で造られた貨物船。昭和16年(1941)7月、陸軍に徴用される。
- 196) 和田君 = 和田清治。パラオ熱帯生物研究所研究員。

- 197) 加藤君 = 加藤源治。同上。メダカの研究者。戦後、錦鯉の餌の開発に成功して財を成した(岡谷氏『南海漂蕩』184頁)。
- 198) 阿加田君 = 阿刀田研二のこと。パラオ熱帯生物研究所研究員。
- 199) Sahabid ト Ngerhesoal ニ行ク = 大幅に書き改められ、「サカビヅ」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』(後、『著作集』第6巻)に収載されている。

【第27冊】

- 200) マガンラン = Mangallang。パラオ本島北端のアルコロン村の西海岸にある村落。昭和10年時の人口88人。
- 201) Ngheangnal = カヤンガル。パラオ本島の北32キロの海上にある島。昭和10年時の人口93人。
- 202) Ngerhelong = アルコロン。ガルコロンとも記す。パラオ本島北端にある村。昭和10年時の人口627人。
- 203) Okotol = オコトル波止場。アルコロン村の西海岸にある波止場。
- 204) コンレイ = Hollei。Holleyとも記す。アルコロン村の西海岸にある村落。昭和10年時の人口94人。
- 205) Ngerbao = ガルバオ, ガラバオ。パラオ本島北端にあるアルコロン村の東海岸にある村落。昭和10年時の人口56人。
- 206) 昼前, 飛行機が来 = 昭和14年4月1日, 大日本航空株式会社の経営で内地-パラオ間の定期航空が開始された。
- 207) Ngardmao = ガラスマオ, ガルツマオ。パラオ本島北西部にある村。昭和10年時の人口125人。
- 208) 古いボロボロノ人骨 = 「ノート」7の157頁に貼付されている久功に宛てた羽根田弥太の5月16日付の手紙によれば, この人骨は, 羽根田により慈恵医大助教授・新井正治のところに持ち込まれ, 老人女性のものであろうと判定された。
- 209) Ngarald = ガラルド。ガラルツとも記す。パラオ本島北部にある村。昭和10年時の人口682人。
- 210) Ngabūkd = ガブクヅ。ガブクド, カボクヅとも記す。ガラルド村の中央西岸にある村落。昭和10年時の人口140人。
- 211) Ngatmel = ガツメル。アルコロン村の東北端にある村落。昭和10年時の人口55人。
- 212) Ngūrūbosang = ウルボサン。グルボサンとも記す。マルキョク村の東南端にある村落。昭和10年時の人口68人。
- 213) 京都大学ノ泉井久之助氏 = 言語学者。明治38年(1905), 大阪に生まれる。京都帝大卒。1936年, 同大助教授。1938年以降, 三回に渡り南洋群島へ調査。専門の印欧語のみならず, 世界の古今東西の言語にも通じていた。マライ = ポリネシア諸語のうち, ミクロネシア諸語を, 音韻対応と文法現象を根拠に系統関係を解明した。
- 214) 赤松俊子ト云フ女流画家 = 丸木俊。洋画家。大正元年(1912), 北海道に生まれる。女子美術専門学校を卒業し, 二科展に出品。昭和16年(1941), 丸木位里と結婚。被爆直後の広島で救援活動を行い, 夫とともにその惨状を目撃し, 以後二人で原爆の絵を描き続けた。昭和42年(1967), 原爆の図丸木美術館を開設。平成12年(2000), 逝去。
- 215) Ngatkip = ガツキップ。ガキツプ, Ngetkib, Ngkatkipとも記す。パラオ本島アイライ村の西南端にある村落。昭和10年時の人口42人。
- 216) Almettengngel = アルマテンゲル。アルメッテンガルとも記す。アルモノグイ村の西岸にあ

- る村落。昭和10年時の人口92人。
- 217) Imilik = アイミリーキ。イミリーキとも記す。パラオ本島西岸にある村。昭和10年時の人口208人。
- 218) a Imeyong = アイミヨン。ア・イメヨンとも記す。アルモノグイ村の中央西部にある村落。昭和10年時の人口98人。
- 219) 藤井病院長 = 藤井保。医師，医学博士。明治26年（1893），秋田県生まれ。東京慈恵会医科大学卒。大正4年（1915）慈恵大学講師。昭和4年（1929），ヤップ島の人口減少問題調査のため，南洋庁勅任高等官としてヤップ島病院長に着任。医療行為をしながら，解剖により死因の究明に努める一方，島民と親しく交流しながら，島民の生活習慣を調査し，人口減少の原因を明らかにした。その後，サイパン島，ポナベ島（現ポンペイ），パラオ島の病院長を歴任した。昭和19年（1944），戦局の悪化により帰国。昭和24年（1949）より北品川に藤井医院を開業した。南洋群島滞在中および帰国後も久功と親しく交流した。昭和63年（1988）逝去。
- 220) 丸山晩霞老 = 水彩画家。慶応3年（1867），長野県生まれ。明治34年（1901），太平洋画会創立に参加。南洋興発株式会社の依頼を受け，南洋の風物を主題とする献上画の下絵写生のため，3月3日入港のサイパン丸で，夫人とともに来島した。
- 221) 真珠養殖場ノ佐伯氏 = 佐伯清。アラカベサンに鰹鮪漁業および鰹節の製造販売を行う，本社・工場をもつ紀美水産合資会社を兄巖と経営していた。また，兄巖が社長を務め，真珠貝の採取ならびに養殖，船舶の所有および貸借その他水産業を行うパラオ水産株式会社の取締役であった。芸術を愛好し，彼の家には多くの人が集まった。大の音楽好きで，青年時代には，日比谷公会堂の音楽会は欠かさず聴いた。久功はしばしばアラカベサンを訪れ，料理好きの夫人の手料理のもてなしを受け，泊まることもあった。しまいには，毎週末訪れ，佐伯家内の空地で泊りがけで彫刻の制作を行った。高松一雄の仕事場もあった（岡谷氏『南海漂蕩』189頁）。なお戦中，久功との交流は一時途絶えたが，佐伯は戦後内地に引上げて，水産業を再興し，久功との交流も復活した。
- 222) 八木隆一郎氏 = 脚本家。明治39年（1906），秋田県生まれ。幼い頃，母とともに函館に渡る。函館商事学校卒業。文学を志して上京。国民新聞の懸賞小説に「新三稜鏡」が入選。新築地劇場に所属し，「螻蛄」を上演，好評を博した。映画の脚本，ラジオ・ドラマの脚本等も書いた。
- 223) ミュンス = アミヨンスとも記す。アラカベサン島中央北岸にある村落。昭和10年時の人口125人（うち島民63人）。
- 224) Ngeriyūngs = ゲリユンス。ガリヨースとも記す。カヤンガル島の南にある島。島は，珊瑚礁で囲まれている。
- 225) 鞠窮如 = 鞠躬如。キッキウウジヨ。体をかがめ，恐れつつしむさま。
- 226) 画ニ添ヘテ（『南洋群島』へ） = これら4編の詩は，「昼」と題され，スケッチとともに『南洋群島』第6巻第5号（1940年5月）に掲載されている。
- 227) バリーノ鳥ト蛇ノ三ツ組ノ彫刻 = この彫刻については，「バリーノ島の土人の玩具」（『野鳥』第8号第5号，昭和16年5月）にスケッチとともに掲載されている。
- 228) 陸男サン = 中村陸郎。佐伯清とともに，パラオ水産株式会社の取締役を務める。
- 229) ガラガサン = ガラカサンとも記す。パラオ本島中央部東岸のカイシャル村にある村落。昭和10年時の人口75人。
- 230) ガラカソウ = Ngerekesou。ガラカソルとも記す。カイシャル村にある村落。昭和10年時の人口20人。
- 231) Nghesar = カイシャル。カイサルとも記す。カイシャル村にある村落。昭和10年時の人口62人。

- 232) Ngersūil = ガツシヨール。ガルスールとも記す。カイシャル村にある村落。昭和10年時の人口78人。
- 233) Ngarangasang = ガラカサン。ガラガサンとも記す。カイシャル村にある村落。昭和10年時の人口75人。
- 234) 西尾善積君ト云フ画家 = 洋画家。明治45年(1912)京都市に生まれる。東京美術学校洋画科卒。在学中の昭和13年(1938)、文展に初入選。昭和18年(1943)、第30回光風会展で光風会賞を受賞。
- 235) 武田氏ト云フ画家 = 武田範芳。洋画家。大正2年(1913)、北海道旭川で生まれる。北海道庁永山農業学校卒業後、昭和9年(1934)上京し、本郷と目白の絵画研究所に学ぶ。ゴーギャンの『ノア・ノア』を読み南洋への憧れを募らせ、昭和14年(1939)10月、南洋群島へ渡る。サイパン、パラオ、ヤップ離島のフララブ島を取材。昭和16年(1941)に帰国。戦後は、フランスを拠点に活動。平成元年(1989)死去。
- 236) 軍艦島 = コロールの北西約8kmの海上にある無人島。島の形が軍艦に似ているのでその名がある。
- 237) 巖サン = 佐伯巖。清の兄。紀美水産合資会社の代表社員、パラオ水産株式会社社長を務め、南洋群島水産組合連合会の専務理事でもあった。
- 238) 近藤新長官着任 = 近藤俊介。南洋庁長官。明治23年(1890)、長崎県に生まれる。大正5年(1916)内務省に入り、警視庁警部となる。福井県・長野県・石川県・熊本県の各知事を歴任した。4月、南洋庁長官に就任し、昭和18年(1943)11月まで在任。
- 239) 清水村 = パラオ本島南東部、カイシャル近くにある植民村。
- 240) 朝日村 = パラオ本島中央部にある植民村。ガルミスカン植民地ともいう。
- 241) ガツパン湾 = ガスパンともいう。パラオ本島の西南部、アイミリーキの北、ガスパンの西にある大きな湾。
- 242) ガルミシカン = ガルミスカンとも記す。パラオ本島の中央西部にあるアルモノグイ村にある村落。昭和10年時の人口192人。
- 243) 大和村 = 朝日村の南西部にある植民村。
- 244) アウロン = ア・ウロンとも記す。ガラルツ村の西岸にある波止場。
- 245) ガベイ = Ngabei。アルコロン村東岸にある村落。昭和10年時の人口61人。
- 246) Ngesang = ゲサン。ガイサンとも記す。パラオ本島北部ガラルド村の中央、東岸にある村落。昭和10年時の人口19人。
- 247) Halap = ハラップ。アカラップとも記す。ゲサンの北にある村落。昭和10年時の人口149人。
- 248) Ulimang = ウリマン。ガラルド村の南部東岸、ゲサンの南にある村落。昭和10年時の人口98人。
- 249) Ngkeklaol = ガクラオ。ガラルド村の南部東岸、ウリマンの南にある村落。昭和10年時の人口126人。
- 250) Ungiwal = ウギワル。オギワルとも記す。パラオ本島中央、東海岸にある村。昭和10年時の人口252人。
- 251) 野村大将 = 野村吉三郎。海軍軍人、外交官、政治家。明治10年(1877)、和歌山県に生まれる。明治31年(1898)、海軍兵学校卒業。明治33年(1900)、海軍少尉に任ぜられる。明治41年(1908)、オーストリア駐在。明治43年(1910)、ドイツ駐在。大正3年(1914)、在米大使館付武官となる。昭和8年(1933)、海軍大将となる。昭和12年(1937)、予備役に編入され、学習院院長となる。阿部内閣で外務大臣をつとめ、第2次近衛内閣の時駐米大使に任ぜられた。

- 252) 十年ブリニ Ngardok ノ湖ニ来タリ=ガルドック湖は、パラオ随一の湖。久功が、10年前にこの湖へ行ったときのことは「ガルドック湖」(『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』〈後、『著作集』第6巻〉)に収載、60～64頁)に記されている。
- 253) 学校ノ坂口サン=坂口与三吉。瑞穂小学校校長。
- 254) 矢崎牧広君ト云フ画家=洋画家。明治38年(1905)、長野県に生まれる。大正13年(1924)上京し、林武に師事。昭和5年(1930年)、独立美術協会展に出品。昭和16年(1941)、独立美術協会展に「南国の家」を出品。第5回海洋美術展に「バラバット島民集会所」「パラオ」を出品。
- 255) 上條氏=上條深志。海軍大佐。昭和13年(1938)6月から16年1月まで、南洋拓殖株式会社の調査課長を務める。昭和18年(1943)12月、サイパン島沖で戦死。著書に『パラオ島誌』(昭和13年12月刊)がある(『復刻版 パラオ島誌』)。
- 256) 前田利為侯=陸軍軍人、侯爵。旧加賀藩主前田家第16代当主。明治18年(1885)、七日市藩前田利昭の五男に生まれる。明治33年(1900)、前田家第15代当主前田利嗣の養嗣子となり、家督を相続する。明治44年(1911)、陸軍士官学校卒業。大正2年(1913)、ドイツへ留学。貴族院議員となる。昭和17年(1942)9月、ボルネオ沖で飛行機事故で死亡。
- 257) 溝口直亮伯=陸軍軍人、政治家、貴族院議員。伯爵。明治11年(1878)、旧新発田藩主・溝口直正の長男として生まれる。明治31年(1898)、陸軍士官学校卒業。明治37年(1904)、日露戦争に出征。明治41年(1908)、陸軍大学校を優等で卒業。

## 【第28冊】

- 258) マラカル=Malakal。ゲマラカルとも記す。コロール島の西にある小さな島。昭和10年時、1,388人の日本人が住んでいた。
- 259) アルモノグイ=Ngeremlengui。ガルムルグイとも記す。パラオ本島中央部西側にある村。昭和10年時の人口422人。
- 260) 御用船=国事に使用するため、官が雇い入れた民間の船。
- 261) Ngarahesoal=アラカサオ。アラカサオ、ガラカソアオとも記す。コロール島、中心部コロールの東にある村落。昭和10年時の人口133人(うち日本人83人)。
- 262) マダライ=Medalai。マダライイとも記す。コロール島西端、アラカベサン島と接する地にある村落。昭和10年時の人口364人(うち日本人360人)。
- 263) 「大阪パップ」=「大阪パック」。明治39年(1906)11月から昭和25年(1950)3月まで刊行されていた漫画雑誌。月2回刊。久功は、第35巻第12号(1940年12月)に、「南洋の伝説・小ウヘリヤングヅ」を寄稿した。
- 264) 栗山君=栗山一夫。南洋群島文化協会職員。月刊誌『南洋群島』の編集に係わる。
- 265) アラバケツ=Ngerbeched。コロール島西南端にある村。マラカル島に接している。
- 266) 山本新聞人=山本耕三。南洋新報編集長。
- 267) 既二前二一書イタヤウニ=『日記』第28冊、昭和15年12月5日参照。
- 268) 「南洋<sup>冊</sup>群島」ニモ意見ヲ書イテ置イタ=久功は、「代用食は々々々」(『南洋群島』第6巻第3号、1940年3月)で、代用食について書いている。
- 269) 紀美水産=佐伯巖を代表社員とする合資会社。鰹鮪漁業及び鰹節の製造販売をし、アラカベサン島に本社及び工場があった。
- 270) Sebelongnl=セベロングル。セベロングルの名は、長編詩「青蜥蜴の夢」に見え、また、「セベロングル」と題された肖像画(1970年制作、世田谷美術館所蔵)がある。
- 271) 絵ト文)=Bari 彫=この時送った絵と文は、「バリー島の土人の玩具」と題され『野鳥』第8

卷5号(1941年5月)に掲載されている。なお、この文は『日記』第27冊、昭和15年4月27日に記されている。

- 272) 十時前パラオ丸ニ乗りコム=この2月1日から5月10日までの、3か月にわたる中央カロリンから東カロリンへの調査旅行記のうち、3月6日までの分は、要約されて「僕のマイクロネシア」(『著作集』第6巻)246~250頁に収められている。
- 273) トラック=トラック諸島。正しくはチューク。カロリン諸島に位置する火山島群。直径65kmの大環礁内の約50の島よりなり、面積95km<sup>2</sup>。当時4,000人の日本人が居住し、西部太平洋における連合艦隊の中核基地だった。
- 274) 偶然結婚披露ノ Kamatep アリシナリ=このカマテックの祝いでは、カプー酒といわれる麻薬的な飲料がふるまわれる。ポリネシアでは普遍しているが、マイクロネシアでは、ここにしか入っていないという。シャカウという大きな草の根を、三尺ほどもある大きな石の平白の上で、手ごろな大きさの石で搗きつぶし、一方い<sup>ち</sup>い<sup>の</sup>一種の若枝の樹皮をはぎさいたものをならべて、その上に、さきに搗きつぶしたシャカウの根をおいて巻きくるみ、両手で両端を握って、手拭を絞るように絞ると、泥水色の、少しねっとりした汁が垂れる。その汁を椰子殻の椀に受けて飲む。祝儀、不祝儀のさい、誰でも通りあわせたものが行けばふるまわれる(「僕のマイクロネシア」(『著作集』第6巻)246・247頁)。
- 275) lelo 島=レロ島。レレ島とも記す。クサイ島の東北にある小島。昭和10年時の人口465人。
- 276) ジャボール=ヤルト島東岸にある村落。昭和10年時の人口556人。
- 277) ヤルト=ラリック諸島の南端にある環礁島。面積8km<sup>2</sup>であるが、50余の小礁からなり、内部に広いラグーンを有する。土地は平坦で低く、標高2mを超えない。昭和10年時の人口1,537人。
- 278) Jokaaj 島=ジョカージ島。この島のまわりに、ボナベ離島の者たちが宿舎にしている、言わば離島村が次々に並んでいた、という(「僕のマイクロネシア」, 前掲書, 248頁)。
- 279) モートロック=モートロック諸島。チューク諸島(トラック諸島)の南東にある諸島。マイクロネシア連邦チューク州に属す。
- 280) ドンニー=サイパン島の東村にある村落。昭和10年時、日本人のみで373人が住んでいた。
- 281) ロタ=テニアン島の南100kmにある島。面積約85km<sup>2</sup>、最高標高495m。昭和10年時の人口5,613人。
- 282) 八時ニ彩天丸ガ来ルト云フノデ=『日記』4月19日、21日~23日の記は、書き改められ、「ロタ日記」と題し、『著作集』第6巻、294~318頁に収載されている。なお、4月22日の記は、『同時代』34号(1979年8月)に、「ロタ日記(抄)」として収められている。
- 283) アグイガン=アギガン島。アグリガン島とも記す。テニアンの南西8kmに位置する、珊瑚礁に囲まれた小島。面積約7km<sup>2</sup>。昭和10年時の人口84人。
- 284) タッタツチノ島民部落=タタツチヨ、タタチヨとも記す。昭和10年時の人口859人。
- 285) 笹鹿 彪氏=明治34年(1901)鳥取県に生まれる。銀行に勤務しながら絵画を独習し、洋画家になることを熱望する。大正9年(1920)上京し、本郷絵画研究所に学ぶ。翌年帝展に初入選。昭和12年(1937)、サイパン、ロタ、ヤップ、パラオなどを巡遊、同年の第1回文展に「セニョーリータ・イスラ」を出品、昭和15年、南洋美術協会結成に参加。2008年に町田市立国際版画美術館等で開催された「美術家たちの南洋群島」で紹介された。
- 286) ソソソ=ロタ島で最も大きい日本人の住む村落。昭和10年時の人口1,969人(うち島民10人)。
- 287) シナバル=日本人の植民村。昭和10年時の人口564人。
- 288) タルガ=日本人の植民村。昭和10年時の人口267人。

- 289) サバナ = 日本人の植民村。昭和 10 年時の人口 181 人。  
 290) 終日室ニ居テ一步モ出ナイ = 24 日・26 日の記の小島についての記述は、一部書き改め、「チチリカ」と題され、「野鳥」第 25 巻 2 号（1960 年 5 月）に収載（後『著作集』第 6 巻 392～395 頁に収載）されている。

## 【第 29 冊】

- 291) 日本画家ノ某氏〔榊原弘〕 = 京都の日本画家。『京都市美術展覧会陳列目録』によれば、日本画部門第 1 回（昭和 10 年）「犬」、第 2 回（昭和 12 年）「田舎の祭」、第 3 回（昭和 13 年）に「烏骨鶏」を出品。榊原紫峰、苔山、始更等の弟（京都市総合資料館提供、レファレンス協会同データベース）。昭和 16 年（1941）以前から、本島マルキョクを拠点に創作活動をしている。昭和 23 年（1948）6 月、肺病により、京都で死去。  
 292) 小サナカレタニ子供マデギッチリ乗セテ = この詩は、「サイパンにて」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収められている（後、『著作集』第 6 巻、70 頁に収載）。  
 293) ウルトラ・マリーンノ = この詩は、「アギーガン島」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収められている（後、『著作集』第 6 巻、69 頁に収載）。  
 294) ドチラガ、ドチラダッタノカハ知ラナイガ = この詩は、「ボナベ」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収められている（後、『著作集』第 6 巻、65・66 頁に収載）。  
 295) ジョーカーチノ残虐ナ叛乱 = ドイツ統治時代の 1910 年にポーンベイ島ジョカージ地区の住民がドイツ政庁に対して起こした反乱。ドイツ政庁の土地改革提案に対し、ジョカージの住民は反対した。そのためドイツ政庁は弾圧し、道路工事に強制就労させられたジョカージ住民が、ことごとくに鞭打たれる事件が起こった。この事件をきっかけに、1910 年 10 月、ジョカージの住民は武装蜂起し、知事や道路工事技師たちを殺害した。ドイツ側は、軍艦やメラネシア人から成る討伐隊を派遣し、鎮圧作戦を行った。翌 11 年 2 月、作戦は終了し、首謀者 15 人が銃殺され、その後、住民の大部分のヤップ島やパラオ島への強制移住・強制労働という措置がとられた（野畑健太郎氏「ジョカージの反乱」『オセアニアを知る事典』1990 年、平凡社）。  
 296) 海上三尺カ五尺ノ = この詩は、「ヤルト」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収められている（後、『著作集』第 6 巻、67 頁に収載）。  
 297) 「南洋群島」 = 南洋群島文化協会が編集・刊行した月刊雑誌。昭和 10 年（1935）創刊し、当初は東京で編集・刊行されたが、昭和 14 年（1939）4 月からパラオで編集・刊行された。  
 298) 石川達三氏 = 小説家。明治 38 年（1905）、秋田県に生まれる。昭和 5 年（1930）、移民の監督者としてブラジルに渡り、数か月後に帰国。ブラジルの農場での体験を元にした『蒼氓』で、昭和 10 年（1935）に第 1 回芥川賞を受賞。社会批判をテーマにした小説を書くが、昭和 13 年（1938）『生きてゐる兵隊』が新聞紙法に問われ発禁処分になり、禁固 4 か月、執行猶予 3 年の判決を受ける。戦後は、日本ベンクラブ会長、日本芸術院会員となる。パラオ滞在中の体験を記したものに、『赤虫島日誌』（1943 年）がある。  
 299) 畑井先生 = 畑井新喜<sup>しんき</sup>。動物学者。明治 9 年（1876）、青森県に生まれる。明治 32 年（1899）渡米、シカゴ大学で学び、博士号を取得。後に、ペンシルベニア大学教授となる。大正 10 年（1921）帰国、東北帝大教授となり、生物学教室を開設した。昭和 9 年（1934）、コロールにパラオ熱帯生物研究所が設立されると、初代所長に就任した。  
 300) アラカマエ = Ngerechemai。ガラガマエ、ガラハマエとも記す。コロールの町の東北、コロール島の北岸にある島民のみが住む村落。昭和 10 年時の人口 91 人。  
 301) イブクル = Iebukel。アイボクルとも記す。コロールの町の東に接している島民のみが住む村落。アラカマエの西に位置する。昭和 10 年時の人口 182 人。

- 302) 午後 Ngarmid ニ行ク=この日のガルミズ (アルミツ) 行きの事は、中島敦「日記」(『中島敦全集』第3巻) 9月10日に記されている。
- 303) Hades = Hadus とも記す。アツス。石積み道、石畳道。
- 304) ア・イライ=パラオ本島南端にある、コロール島に最も近い村。昭和10年時の人口629人。
- 305) 今日出港、中島敦君東へ=9月15日から11月5日までの中島敦の東方の島を訪れた出張については、中島、前掲「日記」9月15日以下に記されている。
- 306) 並河亮氏=なみかわ・りょう。翻訳家、放送作家、評論家。明治38年(1905)、島根県生まれ。NHK 国際部、毎日放送に勤務。後、日大教授となる。並河萬理の父。
- 307) ソノナンデモナイヒト時=この詩は「そのなんでもない……」と題され、『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』に収載されている(後、『著作集』第6巻に収録)。
- 308) 「パラオ島民ノ暦」原稿 = 『南洋群島』第8巻第1号(昭和17年1月) 収載(後、『著作集』第1巻に収録)。
- 309) 中島(敦) 君ガサイバンカラ鎌倉丸デ帰ッテ来=中島敦は、出張で、11月17日から、ヤップ、ロタ、サイパン、テニアン等の諸島を訪れ、12月14日、コロールへ戻ってきた(中島、前掲、「日記」)。
- 310) 十九日=この日夜、中島敦は久功の家を訪れ、「南方離島記」の草稿を読んだ。敦は、その日記に「面白し」と記し、草稿の一部を日記に書き写している(中島敦、前掲、「日記」)。
- 311) 賑ヤカナ此ノ饗宴=この饗宴については、中島敦、前掲「日記」12月21日の項に記されている。
- 312) 中島(敦) 君ガ来=この日の夜、敦は土方宅を訪れ、マルキョク・ガラルド辺のボラ捕りの話、リーフの縁辺での大シャコ貝捕りの話、海亀の脂が天下の珍味であること、マングローブ貝、亀の卵、島民の鶏のしめ方の乱暴な話を、大変興味深く聞いた(中島敦、前掲、「日記」)。
- 313) 敦チャンモ来、飲ミ了ッテ皆デ散歩スル=この大晦日の年越しの会については、中島敦、前掲、「日記」12月31日の項に書かれている。
- 314) 敦チャン、高松君トアラカベサンニ行ク=アラカベサンの佐伯氏宅での元日の御馳走については、中島敦、前掲、「日記」1月1日の項に記されている。
- 315) 午後、中島(幹) 君等オシルコラ作りニ来ル=この日、鍋三杯のしるこを作り、餅も充分にあり、皆腹一杯食べた(中島敦、前掲、「日記」、1月2日の項)。
- 316) 敦チャン、ベリリヨウカラオミヤゲラモッテ帰ッテクル=中島敦の2月5~7日のペリリュー島への出張については、中島、前掲、「日記」に記されている。
- 317) メナード=メナド(Menado)。インドネシアのほぼ中央、セレベス島(スラウエシ島)の北端に突出するミナハサ半島第一の港。『日記』II, 註226参照。

#### 【第30冊】

- 318) 一月十七日=1月17日から31日までの、久功と中島敦の二人でのパラオ本島への出張旅行は、「トンちゃんとの旅」と題され、『著作集』第6巻、334~383頁に収載されている。但し、この『日記』には、1月22日の半ばまでしか書かれていない。また、中島敦、前掲、「日記」に、この出張旅行のことが記されている。なお、『同時代』34号(1979年8月)に、この旅行記の抄文「敦ちゃんとの旅(抄)」が収められている。
- 319) ゲラウスノ部落=ガラウスとも記す。カイシャル村にある村落。昭和10年時の人口71人。
- 320) ウリマン=ガラルド村にある村落。昭和10年時の人口98人。
- 321) ア・ホール村=アコールとも記す。ガラルド村北部にある村落。昭和10年時の人口141人。
- 322) カムセツ部落=カムセツとも記す。アルモノグイ村の西南海岸にある村落。昭和10年時の人

- 口40人。
- 323) 彼等ノ儀式=カヤンガル南村におけるモデクゲイの儀式については、「パラオに於ける信仰的新結社に就いて」(「過去に於けるパラオ人の宗教と信仰」『南洋群島』, 昭和15年8月, 後『著作集』第2巻251~254頁)に記されている。
- 324) 与志チャン=土方与志<sup>ひさよし</sup>(久敬)。演出家。久功の片従兄弟。『日記』I, 註46参照。
- 325) 梅サン=土方梅子。与志の妻。『日記』I, 註19参照。
- 326) 与平チャン=土方与志, 梅子の二男。昭和2年(1927)生まれ。
- 327) 丸木位里ト云フ日本画家=明治34年(1901), 広島で生まれる。長じて上京し, 田中頼璋, 川端龍子に師事。日本南画院, 青竜社に参加。昭和20年(1945)8月, 広島に原爆が投下されると, 妻・俊子とともに広島に赴き, 救援活動に従事した。この体験をもとに, 翌年後と協働で『原爆の図』を発表した。以後, 原爆の絵を描き続けた。
- 328) 東久世ノ忠チャン=東久世通敏(伯爵)と玉子の長男。
- 329) ヨシ子サン=東久世禰子。通忠, 通信の妹。
- 330) 武サン=土方久武。久功の従兄弟。『日記』I, 註203参照。
- 331) マス子サン<sup>(1)</sup>ノ丹那サント云フ人=川瀬伊三郎。増子の夫。増子は小城斉・たかの六女, 文子の妹。
- 332) 敬太=土方敬太。与志, 梅子の長男。
- 333) 全生菴<sup>ぜんしやうあん</sup>=台東区谷中5丁目にある臨濟宗の寺。通称鉄舟寺。幕末~明治前期の剣客・政治家, 山岡鉄舟が明治16年(1883), 維新の際国事に殉じた人々の菩提を弔うために建立した寺で, 鉄舟墓, 現代落語の創始者三遊亭円朝墓, および日本画家松岡楓湖, 教育家棚橋絢子の墓があり, また幽霊画50幅, 西郷隆盛の書など寺宝も多い。
- 334) 発信 中島敦=この時発送したハガキは, 県立神奈川近代文学館に所蔵されている。なお, このハガキの図版が, 「パラオ——二人の人生展」(2007年, 世田谷美術館)図録2003頁に掲載されている。
- 335) 道子=土方道子。久功の兄・久俊と文子との長女。
- 336) 本郷夫人=本郷温子。夫は彫刻家の本郷新。
- 337) 近所ノ彫刻家ノ佐藤君=佐藤忠良。明治45年(1912), 宮城県に生まれる。昭和14年(1939), 東京美術学校彫刻科卒業, 新制作彫刻部を創設。昭和15年(1940), 吉田照と結婚し, 世田谷区世田谷(現・梅丘)の後藤禎二の向かいの家に転居。昭和19年(1944)7月応召。
- 338) 発信 中島敦=この日久功が発送した絵葉書は, 『中島敦全集』第3巻に収載されている。
- 339) 十時頃カ中島敦チャンガ来ル=久功は, 7月6日付の絵葉書に, 水・木・金・土のうち, 午前中に来訪するようにと書いた。
- 340) 「パラオノ石神並ニ石製遺物」=この原稿は, この時は刊行されず, 戦後になって「パラオ石神並に石製遺物報告」と題し, 『民族学研究』第20巻3-4号(1956年12月)に掲載された(後, 『著作集』第2巻に収載)。
- 341) バルサノ大木=この詩は, 一部書き改められ, 「トンちゃんとの旅」の中, (『著作集』第6巻380頁)に収められている。
- 342) アイミリーキノ林業試験地ニ=この詩は, 一部書き改められ, 「トンちゃんとの旅」の中(『著作集』第6巻381頁)に収められている。
- 343) 若イクセニ喘息モチノ敦チャント=この詩は, 一部書き改められ, 「トンちゃんとの旅」の中(『著作集』第6巻380・381頁)に収められている。
- 344) 発信 中島敦=このとき久功が発信した書簡は, 県立神奈川近代文学館に所蔵されている。また, 『中島敦全集』第3巻に収載されている。

- 345) 中島ノ所ニ原稿ヲモッテ行キ=久功は「サトワル生活記録」(後、『流木』と改め、1943年3月、小山書店より刊行)の原稿を中島敦のところへ持って行き読んでもらった。
- 346) 大本願=天台宗の大勧進とともに、善光寺を管理する浄土宗の尼寺。
- 347) 発信……中島敦=この日久功が発送した絵葉書は、県立近代文学館に所蔵されている。
- 348) 敦チャンヲ訪ネル=9月5日付、土方久功・敬子の中島敦・令夫人宛「結婚披露宴招待状」が県立神奈川近代文学館に所蔵されているが、この招待状は、この時持参したものと考えられる。なお、「パラオ——ふたりの人生展」(2007年、世田谷美術館)図録231頁に招待状の図版が掲載されている。
- 349) 南江治郎君<sup>なんえいじろう</sup>=詩人。明治35年(1902)、京都に生まれる。坪内逍遙、小山内薫らに師事。「新詩潮」を主宰する。昭和5年(1930)、人形劇専門誌、「MARIONETTE」を刊行し、新人形劇運動と伝統人形劇の保護を進めた。
- 350) 関君=関嘉彦。社会思想史家、政治家。大正元年(1912)、福岡県に生まれる。東京帝大経済学部に入學し、河合榮治郎に師事する。昭和15年(1940)、太平洋協会研究員となる。昭和17年(1942)、久功とともに、陸軍軍属として太平洋協会より北ボルネオへ派遣され、笠間果雄調査部長(司政長官)のもと司政官(調査部員)となった。戦後は、社会思想研究会を設立。昭和24年(1949)、東京都立大学助教授、のち教授となるが、昭和44年(1969)辞職する。
- 351) 鶴見氏=鶴見祐輔。官僚、政治家。明治18年(1885)、群馬県に生まれる。東京帝大卒業後、鉄道院に入る。大正13年(1924)に退官し、昭和3年(1928)の総選挙で岡山1区から衆議院議員に当選。米内内閣で内務政務次官に就任。太平洋協会理事として、運営の中心となった。
- 352) 英昌=本田英昌。久功の叔父(昌生の弟)、本田讓二の長男。
- 353) 偕行社=将校、准士官を対象とする各種軍装品、軍服、軍帽、軍靴等の製作・販売を行う機関。明治10年(1887)、陸軍将校の集会所・社交場、一種の迎賓館として九段に東京偕行社が設立されたことに始まる。
- 354) 病院=岡田病院。現・世田谷中央病院(世田谷区世田谷1丁目)。